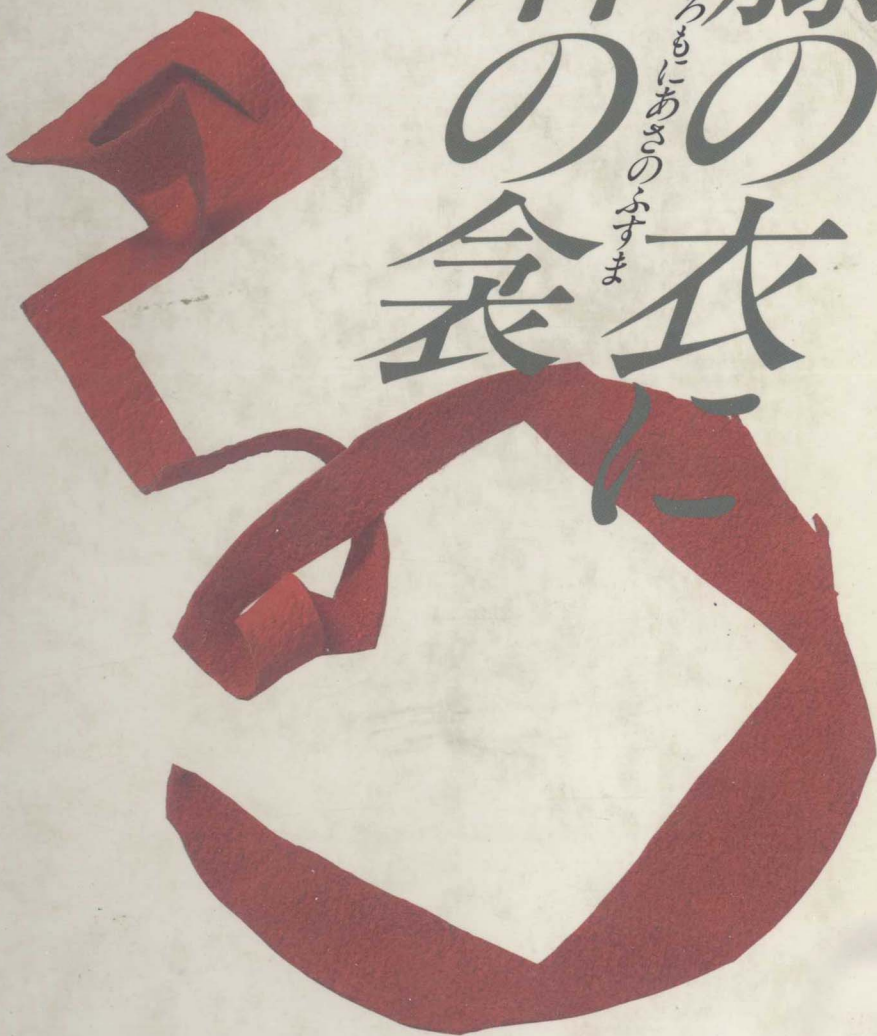


富岡多恵子

taeko tomioka

藤の衣
麻の衾
ふじのいろこまのふすま



富岡多恵子

taeko tomioka

中央公論社

藤の衣に
麻の衾

藤^{ふじ}の衣^{ころも}に麻^{あさ}の衾^{ふすま}

定価九八〇円

昭和五十九年四月二十五日印刷
昭和五十九年五月 七 日発行

著 者 富岡多恵子

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七

振替東京二一三四

©一九八四 検印廃止

ISBN4-12-001284-0

目次

傍観者の歲月――まえがきに代えて 5

性の非日常性 22

ヒトがヒトを生む 39

女の競合 56

「主婦」解体 73

母親からの解放 90

「女のことば」と「国のことば」 107

「家」から「家族」へ
124

「愛」の時代
140

からだの戦略
157

シンデレラの靴
173

「自然」幻想
189

あとがき
205

藤ふじの衣ころもに麻あさの衾ふすま

傍觀者の歲月―まえがきに代えて

一九六五年七月から十ヵ月間、わたしはニューヨークで過した。もう十七年も前のことになってしまったが、その十ヵ月の間に、わたしはいくたりかの女性に出会った。

ケイト・ミレットさんとは住んでいるところが近くで行き来があった。ケイトさんは日本に二、三年滞在したことがあり、日本滞在中には彫刻の個展もしていた。わたしが会ったころは、コロンビア大学で教えながら、彼女自身は大学院の論文を書いていた。そのケイトさんが、わたしの詩の朗読会を自分の教えているカレッジでやりたいというので、わたしが自分の詩を英語にし、ケイトさんが直してくれたのであったが、ケイトさんはそれだけでは満足せず、時間をさいて、わたしに朗読の稽古を何度かしてくれた。

その当時の彼女のモーレッツ勉強ぶりは、端目で見ただけでわかるものであった。受験生のように勉強と仕事の時間割がこまかくきめられているようだった。だから、わたしに朗読の稽古をしてやるといふのはまったく好意から出たもので、三十分の時間も彼女には貴重だったにちがいな

い。一分か二分遅れたことがあった。「オソーイ」と叱られた。わたしは、自分でも不思議なくらいに時間厳守の方であるが、ウワテがいると思った。それくらいに彼女は忙しいのであった。

その時ケイトさんの書いていた論文が『性の政治学』であったと知ったのは、わたしが日本へ帰って何年かたってからである。ケイト・ミレットはその『性の政治学』で「ウーマン・リブ」のリーダーとなって世の中へ出た。本屋で、雑誌『タイム』の表紙にケイトさんが出ていたのを見てびっくりするまで、わたしはケイトさんがアメリカでどういう風に話題になっているか知らなかった。

もうひとり、一九六五年にわたしは水田宗子さんというひとと出会った。水田さんは当時イエール大学の大学院で勉強していて、コネチカットにいた。わたしはニューヨークから汽車で彼女に会いにいった。

水田さんは結婚していて、その時赤ん坊がひとりいた。その時からずっと、水田さんとの交友はつづいている。彼女はイエール大学でドクターをとり、その後は大学で教えて、現在までに五人の子供を生み育てている。わたしは十七年余の間に、水田さんから教わるが多かった。

ケイト・ミレットさんは、或る時期、ウーマン・リブの闘士という風に伝えられたことがあった。ただし、あの朗読の稽古をしてもらって以来、わたしは一度も彼女に会っていないし、アメリカに住んでいるわけではないから、彼女の活動の実際の様子は知らなかった。

水田さんには、アメリカでも日本でも機会があれば会うので、話を聴くことができる。今年も

彼女が日本に半年以上滞在していたので、この十七、八年の間に、アメリカで女性解放運動がどういう風に変ってきたかを聴いた。わたしは水田さんの『ヒロインからヒーローへ』という書物を読んでたいへん刺激を受けていた。

ところで、わたし自身は、今まで一度も「ウーマン・リブ」の運動にかかわったことはない。無関心ではなかったが、実際に行動したことはなかった。ただ、一九七一年に『わたしのオンナ革命』という本を出している。といっても、この本は雑文を集めたものであり、「ウーマン・リブ」のなんたるかもよく知らぬままに、たまたま乞われて書いた文章の多くが、結果として、女性について書かれたものであったことから、題がつけられたにすぎない。したがって、『わたしのオンナ革命』は、「ウーマン・リブ」運動に実際にかかわることでは書かれたものではない。しかし、傍観者のわたしでさえも、オンナ革命なんて勇ましい題を半分おもしろがりながらとはいえずけていることは、やはり当時の、「ウーマン・リブ」の波を感じ、刺激を受けたところがあつたからであらう。

さて、わたしが水田さんに会った一九六五年の二年か三年前（はつきりしたことを聴きのがした）、彼女は日本からアメリカに留学したのであるが、そのころ（一九六〇年代のはじめごろ）のアメリカの大学の様子はどうかだったか。

——もちろん、男女共学だったでしょう？

水田 当時は男女共学ではなかったんです。プリンストン大学に入学の申込みをして、うちの大学は女子学生は採りませんという手紙をもらって、その手紙は今もとってあります。大学によつては、同窓会の勢力が強くて、がんとして女子は入れないという動きがありましたね。

——大学院はどうなんですか。

水田 大学院でも、入れないところもありましたが、だいたいは女子も入れました。ところが、大学院の学生でも女子寮があつて、厳しい監視のもとに管理されていたんです。週末以外は夜八時が門限だったり、男のひとが入ってきてはいけなかったり。わたしがいた時も、男のひとが入ってきたというので、ハウスマザーが消防車を呼ぶという事件がありました。なぜ消防車かというと、消防車がいちばん早くきてくれるからなんです。大学院の学生はもうおとなでしょう。それがそんな風だったんです。

——いつごろから男女共学に？

水田 六〇年代の半ばごろから男女共学運動が起つて、イエール大学では六七年から男女共学が始まったんです。最後まで残ったのはプリンストン大学でしたけれど、これも七〇年ごろまでには共学になったと思います。

同じころに女子大学では、反対に男子を入れようという動きが出て、パッサーとか、スミスのような有名女子大学に男子が入り共学になりましたね。

日本の学校が戦後男女共学になったのは、アメリカの命令か真似だと思っている者には、水田さんの話は不思議な感じを与える。わたしは一九五四年に大学に入ったが、そのころ日本では国立大学をはじめほとんどが女子を入れていた。ただ、女子大学は昔のままだった。公立私立を問わず、女子大学に男子を入れようという動きがあったとは、その後も聞いたことはない。男女共学というと、女子大学にも男子を入れることを当然とするのはアメリカらしいというか、おもしろいところではある。

それはともかく、一九六五年にアメリカへはじめていった時、「ウーマン・リブ」という言葉を聞かなかった。もし、すでにハヤリの言葉であったとしたら、ケイト・ミレットさんあたりはおそらくさかんに使っていたはずである。しかしこの言葉はアメリカにあらわれて、アメリカから日本にきた言葉である。いつのころから日本で耳にしはじめたのだろうか。おそらく、六〇年代の終りごろだろう。わたしでさえ、オンナ革命なんて題を本につけたぐらいだから。

一九五八年にわたしは大学を卒業したが、その時からすでに二十五年たっている。「ウーマン・リブ」という言葉を耳にしはじめてからでも、十数年たっている。「ウーマン・リブ」ではなく「フェミニズム」といわれるようになってからでも、かなりたっている。

ところで、このごろ「ウーマン・リブ」という言葉をほとんど聞かなくなった。ひところ、エリカ・ジョングの小説『翔ぶのが怖い』から「翔んでる女」という言葉もさかんに使われたが、それも聞かなくなった。「ウーマン・リブ」も「翔んでる女」も、ジャーナリズムによって、か

らかつて使われることが多かったので、多くのひと、それ以上深く考えることなく、流行現象として見送られていった。だから世間では、「ウーマン・リブ」も、もうすたりましたなあ、ということになるのである。そうすると、いや、そんなことはありません、といったくなるヘンな癖がわたしにはある。

わたしは最初にもいったように、女性運動には一度もかかわったことがない。十一年前に『わたしのオンナ革命』という題の本を出したあとしばらくは、本の題のせいもあると思うが、さまざまな女性運動をしているグループから、話をしにきてくれとか、なにか書いてくれとか、集会に出よとか、いろいろに誘われることもあった。また、主として女性向けの雑誌からも、女の生き方についての考えを書くよう乞われることが多かった。文章を書くことは仕事であるから、多少は書いたが、その他、実際に行動しなくてはならぬものはすべてことわってきた。わたしは傍観者となり、それがたとえいかにズリイ奴に見えようと、かまわないと思ってきた。

大学を卒業してから二十五年たつといったが、大学卒業をオトナ（成人）への出発の区切りとしてみると、わたしは二十五年もオトナをやっていることになる。二十五年の間には世の中も変わるが、わたしという個人の生活や考え方も当然変ってきた。女性解放のために激動の二十五年を送ったひともあるだろうが、傍観者の二十五年をとぎれとぎれにもち出してみよう。

大学卒業を前にして、わたしがいちばん思い悩んだのは、卒業後自分がどうして食べていくかということだった。大学卒業までオヤに養ってもらっていたわけであるが、卒業後は、自分が自

分を養っていくのが当然だと思っていた。しかし、二十二歳の女について、オヤ及び世間が問題にしているのは結婚であった。もし二十二歳の大学卒業者が男子ならば、オヤや世間は就職をまづ問題にしただろう。これは「男が女を養い、女は男に養われる」という考えを土台としていた。二十五年後の今日も、大学卒業見込の女子に働き口が少いのは、この考え方がまだ根強く世の中の土台を支えているからであらう。

卒業するころ、わたしのいた女子大学では「永久就職」という言葉がはやっていた。結婚は永久の就職口だから、結婚すれば就職難は解決するというわけであった。結婚を就職とするのは、結婚することと「主婦」という職業に就くとの意識的表明であったかというところ、そうでもなかった。ただ漠然と、就職か結婚かの二者択一があり、その就職もやがて結婚に吸収されてしまうことを「永久就職」という言葉はあらわしていた。

わたしは二十二歳の時、結婚を「永久就職」と信じることはできなかった。「主婦」がたとえ「職業」であったとしても、「主婦」という「職業」に就くことは不安がありすぎるように思えた。「主婦」は、まず夫があり、そして当然家庭があつてこそ存在する「職業」であるが、わたしには、夫も家庭も、いつなんどき消えてなくなってしまうかわからぬものに見えるからだだった。

おそらく、わたしのこういう悲観的な見方は、両親の姿を見てきたことでつくられたところもあった。明治生れの母親は、「主婦」を「職業」と信じこみ、その「職業」にはきわめてマジメに打ちこんできたが、途中から夫が家からいなくなり、家庭は崩壊した。それまでどのような職

業的訓練も受けていないのだから、当然「主婦」以外には、なにをする能力もなかった。

いつのころからか、主婦に職業的意味をこめる言葉として「プロの主婦」とか「専業主婦」というのが出現してきたが、「主婦」はたして「職業」なのであろうか。

「主婦」とはまず、ひとりの男の「妻」であることが第一の条件であるのはまちがいない。そして多くは、その男（夫）との子供の「母親」でもある。

「主婦」の、職業的領分としては、まず家事労働を含む家庭管理であろう。子供のある場合は育児が加わる。

では、「性」はどうなるのか。「性」は「妻」の領分であって「主婦」という職業的領分には入らないのだろうか。しかし「主婦」は「妻」であることが前提であり、「夫」との間に公認された「性」のあることが「妻」を保証し、それが「主婦」を保証しているのであるから、「性」のない「主婦」はたんなる家政婦とか家庭管理人になってしまう。

もし「職業」としての「主婦」から「性」をはずしてしまいたいのなら、たんに「男」と生活をもにする「女」という認識に立つしかない。しかしこの「女」は「妻」でなくともいいわけだから「主婦」とは断定しがたい。

二十二歳のわたしは、ここまで考えなかった。ただ漠然と「職業」としての「主婦」に対して不安があった。「主婦」という「職業」は、いつコケルかわからない職業だと思えるのだった。それは「主婦」というのはいつも相手次第であって、相手の事情によってその「職業は元も子」

もなくなるからである。相手が一年後に死ねば一年後には失業であり、「主婦」になるためにはまた別の相手を見つけないといけない。つまり、特定の相手あってはじめてありえる「職業」であって、自分ひとりで勝手にこなさなければならないのである。しかしこれは、相手も運もよければかなりいい「職業」かもしれない。二十二歳の時のわたしはそこまではわからなかった。

ところで、一九六〇年代のアメリカには、中産階級の主婦の問題があらわれた。

アメリカの場合は、高学歴の女性は自分と同じくらいかそれ以上の高学歴の男性と結婚するから、結婚した女性は働く必要がなくなる。高学歴の夫の収入は多いから、夫だけの収入で充分生活ができるからである。すると、妻である女性は「主婦」としての職業的領分の仕事だけでは、知的にも肉体的にもエネルギーがあまってしまう。そのエネルギーをどのように社会的に生かすかが問題となった。

ただし、多くは、一家にひとりの収入では生活できず、妻である「主婦」も働いて収入を得て、一家に二つの収入が必要であるわけだから、高学歴主婦の提起する問題は、さまざまな矛盾にぶつかるのは当然だった。

こういうことは、昨今の日本にも思いあたる問題である。収入を得るために働きに出る「主婦」は、家庭に帰れば「主婦」の職業的領分の仕事があり、実際は二重労働に悩むひとは多かったのである。この問題は、社会主義国でも解決されていない。

大学卒業当時のわたしは、こんなところまではとうてい考え及ばず、ただ、女もオトナになれ

ば自分のために「職業」をまずもたねばならぬと思っていた。そして結婚は、そのあと起る出来事であり、家事労働は双方が分担するものと、「理想的」に考えていたのである。

わたしは卒業後、学校の「教師」という「職業」を得た。しかしこの時の経済的実情は惨憺たるものであって、その「職業」によって得た収入を、わたしはほとんどこづかい銭につかい果していたのである。オヤの家にタダで住み、給料の四分の一にもならぬ「涙金」を食費としてオヤに渡したが、それもたいていは「借金」としてつかいこんでしまっていた。もし「理想的」に自立しても、アパートの部屋代か下宿代を払えば、あとはなにを食べられるか想像もできないテイタラクであった。

その後、「教師」という「職業」をすてて、男といっしょに暮すようになったが、それは「結婚」ではなかった。男と暮しはじめた当初から、男の仕事を手伝うことを余儀なくされた。一種の家内手工業であったからやむをえなかったのである。わたしの仕事は、あくまで補助的なものであったが、その補助は必要だった。しかしいくら必要な補助でも、金が支払われるのは男の仕事に対してであり、わたしは「無職」であった。

経済的余裕ができはじめると、わたしは「主婦」的な職業的領分を分担せざるをえなくなった。わたしの代りに、補助的仕事をする人間を雇い入れるようになったからである。わたしは家政婦と秘書的仕事を兼業した。もちろん、これらは、「男」とカップルを組む「女」に必要なものな無償の仕事である。このわたしの仕事及び立場は、結果としてきわめて「主婦」に近いものにな